
 書 評

生物多様性条約と名古屋議定書の課題

「生物資源へのアクセスと利益配分 (ABS)」問題—科学と産業の視点から

著者：炭田精造

発行：けやき出版

発行日：2021年6月10日

ISBN 978-4-87751-609-3, A5判 222 ページ, 価格 2,500 円 (本体)

悲しいことであるが、本書の著者である炭田さんが2021年5月29日79歳にて永眠されたとの連絡を受けた。生前、炭田さんは、1996年から始まった生物多様性条約 (CBD) やアクセスと利益配分 (ABS) などの国際会議で自分が見聞きしたことを後世のためにもまとめておきたいと話していた。しかし、2021年3月半ばの時点ではこの原稿は未完成であったようだ。炭田さんは思考力も体力も限界に近い中、奥様の献身的なサポートもあり、何とか校正を済ませ、お亡くなりになる2日前に見本を見ることができたという。こうして出版された「生物多様性条約と名古屋議定書の課題」であるが、素晴らしい本である。

本書は6章から構成されている。「第1章 はじめに南北問題があった」では、第2章以降の話題となるCBDが議論されるようになった背景について語られている。日本は1993年12月29日にCBD加盟国となったが、「第2章 生物多様性時代の幕開け」では、OECDの1994年当時の動きとともに、JBAが主導した日本と東南アジアの研究協力プロジェクトについて述べられている。途上国による生物資源の囲い込みの動きがある中、このプロジェクトはCBD時代における先駆的な活動であった。1997年4月にJBAの中に生物資源総合研究所が発足したが、翌年、その中に生物多様性委員会が設置され、その中に「カルチャーコレクション (CC) とデータベース (DB)」「アクセスと利益配分 (ABS)」の二つの委員会が置かれた。「第3章 日本の新時代型「微生物資源センター」の設立」では、この「CCとDB」委員会での議論と2002年に千葉県木更津市かずさに開所した製品評価技術基盤機構 (NITE) バイオテクノロジーセンターの誕生についての経緯が記述されている。「第4章「アクセスと利益配分 (ABS)」時代の到来」では、「ABS」委員会の最初の成果物「遺伝資源へのアクセスガイドブック '99」

の出版について記述されているが、これはJBAのABS普及活動の原点となっており、その後のボン・ガイドライン並びに遺伝資源へのアクセス手引きの普及活動へと続いている。また、NITE バイオテクノロジーセンターは2003年6月からインドネシアと微生物探索プロジェクトをスタートさせたが、当時、ABS関連国内法が無い中、どのようにプロジェクト合意書が作成され、インドネシアの微生物資源にアクセスできたかが詳細に述べられている。「第5章「名古屋議定書」に至る泥沼の南北交渉」では、著者の優れた国際センスが存分に披露されている。著者はCBDのCOP3から2010年10月に名古屋で開催されたCOP10まで毎回参加しており、更にCOPの会期間会合であるABS作業部会にもすべて参加している。これらの国際会議を通じて著者が肌で感じた思いと、COP10で採択された名古屋議定書までのドタバタが紹介されている。特に、COP10の最後の2日間で急遽採択された名古屋議定書の謎についての解説は興味深い。また、コラム「国際交渉の心得 12カ条」は国際舞台で長年活躍してきた著者だからいえる12カ条であり、是非とも心に留めておきたい言葉である。最後の「第6章 名古屋議定書の実施とその後の状況」では、名古屋議定書の採択後の日本の批准に伴うABS指針についてその経緯を解説するとともに、世界の動きを紹介している。

本書のあとがきで、炭田さんは常に戦いの場にある兵士のような緊張感で生きてきたと述べているが、本書を読んでいると世界の舞台での国際交渉の緊張感が伝わってくる。海外生物資源調査や利用を考えている皆さん、国際交渉の舞台で活躍したい皆さん、それに限らず色々な人に是非とも読んでいただきたい一冊である。

(玉川大学農学部客員教授
元NITE バイオテクノロジーセンター技監 安藤勝彦)